

どこまでもどこまでも続いていた草原の向こうに、まるで蜃気楼のように茶色い街並みが浮かんできた。高度4000メートルの世界に広がる大草原の真ん中に忽然と現われる天空の町、理塘だ。

私を乗せた北京軍団の車は街の郊外に向かって進んでいった。前方の小高い丘の上には大きなチベット寺院が見える。寺院の門前にはチベット仏教の祈りの言葉が刻み込まれたマニ石が城壁のように積み上げられたマニ塚があった。瓦のような薄い石板におもいおもいのデザインされた文字が彫りこまれ彩色されたマニ石は美しく、思わず積まれているマニ石の中から自分のお気に入りの一枚などを探してしまう。

標高が高いせいか理塘の空は日本の空よりもずっとずっと青い。雲ひとつない群青色の空から薄い酸素を通して熱波のようにジリジリと照りつけてくる太陽は暑いというより熱いと感じられる程であったが、寺の山門をくぐり太陽に焼かれながら境内を通過して薄暗い寺院の中に入ると、とたんに空気はひんやりとした。暗闇に目が慣れて浮かび上がってくる寺院の内部は柱といわず天井といわず何処もかしこもびっしりと極彩色に彩色されて、赤、青、緑、黄色など原色の色鮮やかな布地に金糸で刺繍が施された金襴緞子様の御簾が幾重にも垂れ下がっている。

四方の壁は様々な仏の姿や極楽図、地獄図、六道図、しゃれこうべのネックレスを首にかけ炎の中で目玉の飛び出した人の生首をふりまわす憤怒像や鬼の形相で女神と交わる歓喜仏像など怪しくも魅惑的なチベット仏画で隙間無く埋め尽くされ、本殿の奥には体中に貼られた金箔で黄金色に輝く数々の仏像が安置されていた。それらが渾然一体となり暗闇の中にびっしりと灯された蝋燭の灯に揺らめいて浮かび上がる様は、まるでその空間自体が極彩色の曼荼羅のようで、太陽の輝いている表の世界から突然異世界に迷い込んだような錯覚に陥り頭の芯がボーっとしてしまう。

寺の奥のほうではキリキリキリと不思議な音がしていた。近づいてみると、数人の僧侶が床に屈みこみ一心に砂曼荼羅を描いているところだ。細い筒の中に彩色された細かな砂を詰め、細い棒で擦りながらその振動で少しずつ少しずつ砂を落として、二畳分程もある曼荼羅に細密な模様を描いていく気が遠くなりそうなほど細かな作業だ。

すでに完成している曼荼羅の中心部分は、驚くほど微細な部分までが綿密に書き込まれ、色分けされた砂でグラデーションが付けられて、それが砂で描かれていると俄には信じられないほど繊細で美しかった。床に這いつくばって息をつめ、一分の手元の狂いも許されない凄まじい緊張と、集中力を必要とされている作業を目の当りにして、これ程の手をかけて生み出される美しい砂曼荼羅が、いずれ完成した後に壊されてしまうものだと思うと切なさに胸苦しさを思えるほどであったが、その儚さが仏教の世界観でいう諸行無常を表わしているのだという。

ひと通り寺院の内部を見学し終えて表に出ようとする、二階にあがる階段の上から北京軍団に声をかけられ見上げると、僧侶の一人が二階の奥にある部屋の鍵を開けて扉を開いているところだった。あ、二階にも部屋があるの？無造作に階段を登りドアの中を覗き込んだ私は思わず息を呑んだ。扉の内側は部屋ではなく、細いテラスの通路のようになっていて、その向こうは建物全体が吹き抜けになっており、三階建の建物に相当するほどの大きな大きな仏像が私を見おろしていた。先程まで私達が見学していた寺院の後ろにはこんなに大きなご本尊様が隠されていたのだ。

思いもかけずに向かい合ったチベット佛の包み込まれるような慈愛の眼差しに虚を突かれ、この旅の間中に感じていた様々な気持ちが一気にこみ上げてくると思わず涙がこぼれて止まらなくなってしまった。何故自分が泣いているのか訳もわからず一心に仏像に向かって手を合わせていると、そんな私の様子を見て傍に立っていた僧侶が少し苦笑していたのが恥ずかしかった。

寺を出て車に戻り参道となる道路をゆるゆると走っていると、道路脇に先程のマニ塚に積まれていたようなマニ石を並べ、どうやら販売しているらしい家があった。

車を止めた北京軍団は、「チベット地方を旅した記念にこれを土産に買って帰るのも良いじゃないか」と語り合いながらマニ石を物色していたが、店主らしい人物はその場におらず売値がいくらなのかも判らない。どうやらその家の子供らしい少年がそばにやってくると、軍団の一人が一番美しく彩色されていたマニ石を取り上げ、おどけた様子で「おい坊主、これは10元だよな？ほら、10元やるから一つくれよ」と明らかに揶揄するような

調子で子供に話しかけ、子供がかぶりを振ると今度はやにわに高圧的な態度で「おい、お前の親父はどこに居るんだ！？今すぐ呼んでこい！！」「早く行け！」と怒鳴りつけた。

それを見ていた私は嫌な気持ちだった。これまでも薄々感じていたが彼等はチベット族の土地を旅させてもらいながらもその土地の人々を自分達より劣った民族と見下している様子なのが伝わってくる。今回の旅を通してチベット民族の人や暮らしに深い親愛の気持ちを持っていた私は、その場に一緒にいる事でそんな彼等の仲間だと思われなくなかった。

そういえば・・・亜丁村の宿屋で彼等が亜丁の少年を食卓に誘った時、いつもは人懐こい少年が北京軍団とは全く交わろうとしなかった様子を思い出した。あの時の私には訳が判らなかったが、若しかしたら亜丁の少年は彼等が自分たちを蔑んでいる空気のようなものを敏感に感じ取っていたのかもしれない。

そのうちに何処から現われたのか先程の少年の父親と見られるマニ石屋の店主も姿を見せたが、北京軍団は値段の折り合いが付かなかったのか交渉は決裂したようだった。美しくデザインされたチベット文字で祈りの言葉が刻み込まれたマニ石は、持ち帰れるものなら私も欲しかったが身軽が必須の一人旅で重い石版など持ち帰るのはとても無理だ。彼等がやり取りしている間、せめてもの記念にと私は自分の手帳を取り出して石に刻み込まれている祈りの言葉、オン・マニ・ペネ・ホンの文字をスケッチで写し取った。

その後別の土地へと進む予定の北京軍団は私を降ろすために車を理塘の街中に向けた。ひょんな事から思いがけず3日間行動を共にする事となった北京軍団ともこれでお別れだ。

「小姐、理塘の宿は何処にするつもりだい？」

3年前の旅でも烏理氏と共に理塘を訪れていたとはいえ、人に連れられて歩いただけの土地など全く何も覚えていなかったが、宿の事には心当たりがあった。ピサ延長の為に暫く滞在していた成都の宿で知り合った日本人旅行者の青年に、「理塘で泊まるなら此処が手軽で良いよ」と勧められた宿の名前を手帳に記してあったのだ。それを運転していた石頭に差し出して見せ、彼が車の窓から通行人にその場所を尋ねると、さして広くもない街の事で、あっさり目的の宿は見つかった。

私は車を降りるとだいぶホコリにまみれているザックを車の後部から取り出した。亜丁から此処まで車で快

適に送り届けて貰った事はとても有難かったが、別れの挨拶を交わして走り去っていく北京軍団の車を見送ると、どこかせいせいしたような気分になっていた。きっとそれは北京軍団の方も同じではとも思われたが、特に誘われていた訳でもないのに自分の都合であつかましく居候的同乗をさせて貰っておきながら、その相手を疎ましく思うなど全く身勝手な自分の心を恥じながらも、私は開放感に大きく伸びをしてザックをとりあげ宿の門をくぐった。

理塘の宿は1泊20元だった。客室は2階にあって日当たりが良く、窓からは宿の前を走る道路を見渡す事ができた。洗濯物は屋上に干せるトイレとシャワーは共同だが、それが当たり前の旅を続けている私には何の問題もなく快適な部屋だ。

部屋に荷物をおろして一息入れると、早速新しい街に着いた時の恒例行事である街の探検に繰り出した。

以前にこの街を訪れた時の記憶を手繰りながら行き当たりばったり歩き回り、街の感触を確かめるような気分で活気溢れる市場の空気を味わったり、道端の屋台で買い食いをしてみたり、たいして必要でもない雑貨を買い物したり、観光客向けなのかお洒落好きな遊牧民相手なのかアクセサリーを売る店が軒を連ねている場所をひやかしたりした。ちょっと珍しかったのは、公衆電話の代わりに店員にかけたい番号を告げて電話をかけてもらう公衆電話屋さんや、街外れに水がジャージャーと流れる音のする店があり、いったい何かと思えば、ちょうど日本のコインシャワーのように、お金を払ってシャワーを浴びる場所らしい。だいぶ昔にチベット人は身体を洗う習慣が無いというような話を、何かの本で読んだような記憶があったが、こんな店があるのならそんなの全くの嘘じゃないか。

康定を出て以来滞在していた稻城や亜丁と比べ、理塘は久しぶりに街と呼べる場所だ。散歩がてらに歩きまわればそれなりに見る物は色々あったが、何よりも目を引くのはこの街の人間だった。

大草原の真ん中にある土地柄ゆえか大柄な体軀に鋭い目鼻立ち、髪を長く伸ばし、動物の毛皮やシルバーのアクセサリーを身につけて、ジーンズにブーツ、腰には短剣、テングロンハットを小粋にかぶった、アメリカ西部開拓時代のカーボーイそのままのような遊牧民の姿が圧倒的に多いのだ。道路脇にはそんな彼等の現代の馬であるバイクがズラッと並んで停めてあり、どれも競い合うように派手な飾りが施してある、そんなバイクに跨

って長い髪をなびかせ走り回る男たちは現代版イージーライダーと呼びたくなるカッコ良さだ。

現代の世の中に、まだこんな世界があるなんて！地に足が着かないほど彼等の姿に目をひかれながら、街の目抜き通りとなる一角を通りかかると、歩道には何やら大勢人だかりがしていた。何だろうと覗き込んでみれば、そこでは地面に賭場を広げて街頭博打の真っ最中なのだ。ルールはいたって簡単で、大きな紙を6分割して線を引き、それぞれの枱の中には絵の具で描かれた龍、象、鶏、パンダ、虎、亀の絵が思わず笑ってしまいそうなほど拙い姿で描かれている。

お客が好きな動物の絵のマスにお金を張ると、胴元がこれまた同じ動物の絵が六面に貼られている3つのサイコロを菓子箱の中で振り、蓋を開けた時に自分の賭けた動物の目が出ていたら配当金がもらえるという単純なもので、サイコロの出目の数により配当が増え、3つのサイコロ全ての目が自分の賭けた動物だった時に最高倍率となる訳だ。あまりに解り易いルールに惹かれてか賭けに参加する人間も多く、場は盛り上がっていたが動いている金額はどれも10元、20元といった小額紙幣ばかりのちょっぴり微笑ましいものだった。中には最初の一回で賭けたお金を倍にしてすぐにその場を離れていく利口者もいたが、大抵は最初にちょっとくらい勝っても結局最後には勝った分を全てすってしまうお客が殆どで、やっぱりそこは博打なのだ。胴元はこんな下手くそな動物の絵とお菓子の空箱に3つのサイコロだけで、それなりに結構儲けている様子だ。

お金儲けってアイデアだなあ～～と思わず感心してしまっただが、何処かのお金持ちが大金を張って大勝してしまったらどうするんだろう？胴元のおじさんはどう見てもそんなに裕福そうな身なりでは無いし、ここはやっぱり胴元もお客も小額紙幣でやり合うのが原則のような田舎町ならではのチープな街頭博打なのだろうか。

下手くそな動物の絵に大の大人が一喜一憂している、こんなチープな街頭博打がこのチベタン・カーポイの街に存在しているという事が嬉しくなってしまったので、私も話の種にと思わずポケットの中のサイフを握ってしまったが、考えてみればまだこの先も旅を続けたい身の上の私としては限られた中国元を無駄使いする訳にはいかないのだ。それに加えて冷静に観察してみれば、そんな街頭博打に首を突っ込んでいるのはちょっとやさぐれた雰囲気の子ばかりで、夢中になって覗き込んでいる女は私一人だ。皆の注目を浴びるのが照れくさかった事もあり、博打に参加するのは踏みとどまって盛り

上がる輪の後ろで様子を見てみると、そこにまるでハーレーの様に飾りが施されたバイクに跨り、フリンジ付きのお洒落な革ジャンを羽織った、見るからにカッコマンの若い遊牧民の男がやってくると博打の輪に加わってきた。

黒皮のテングロンハットにミラーのサングラスを光らせて、気取った仕草で気前良く百元札を何枚か取り出し、胴元に命じて細かく両替すると手馴れた様子でお金を張っていく彼の様子に否応無く皆の注目が集まった。賭けている動物も龍だとか虎だとか、きっと彼の好みなのだろうがちょっとカッコいいイメージの動物なのが微笑ましい。ところがどういふ訳だが、この遊牧青年が賭ける動物、賭ける動物がことごとく毎回外れてしまうのだ。只でさえ注目を集めていたカッコマンの戦績にだんだんとギャラリーから苦笑が沸きあがってきて、キザな彼も動揺している様子だ。

最初のうちは一気に負けを取り返そうと多めの金額を張ったりして奮闘していた彼も、とうとう最初に取り出した数百元のお金が尽きようとしたところで、突然今日はツキが無いと諦めたのか、急にアタフタとわざとらしく時計を見たり、あたりを見回して「あ！予定を忘れてた！」といった様子を取り繕うと慌てた風を装って小走りに博打の輪から離れていった。変に気取って現われただけに、そんな様子が余計に滑稽で輪の中からは笑い声が起る。カッコマンは形無しだ。

街頭博打の様子は面白くて見飽きなかったが、そろそろ夕暮れが近づいていた。キリが無いのでカッコマンの退場と共に私もその場を後にすると、適当な店に入って食事を注文した。一人旅の身の上では覚悟の上の事ながら、やはり一人でボソボソと食べる夕食は侘しいものだ。昨夜はリー・ルー・ハイと一緒に楽しかったのにな・・・ちょっぴり稲城を恋しく想いながら食事していると後から店に入ってきて私のテーブルに相席で座った労働者風の三人組の男が話しかけてきて、自分たちの注文したおかずも一緒に食べるようにと勧めてくれた。

話を聞いてみると彼等は漢民族でトラックの運転のような仕事をしているのだそうだ。おかずも嬉しかったが、寂しい夕食時の話し相手が出来た事がもっと嬉しく、理塘第一日目もどうにか楽しく締めくくる事ができた。やっぱり一人旅の醍醐味はこんなさりげない土地のひととの触れ合いの中にあるのだ。(次号に続く)